
一対一のかくれんぼ

月下の奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一対一のかくれんぼ

【Nコード】

N8941J

【作者名】

月下の奇術師

【あらすじ】

「一対一でかくれんぼをしませんか？」突然のキッドからの発言。果たして新一はキッドの正体を暴けるのか！？怪盗VS探偵！勝負の結果は！？

1 怪盗の発言と新一

本当に来てたんだな……コソ泥さんよお

「おやおや来て頂けたんですね？ありがとうございます」

「暗号の答えを確かめたかっただけさ……それより何のために俺をここに呼び出したんだ？」

そう、俺は今ビルの屋上にいる。その理由は今日の朝の出来事にあった……

「新一起きてる？」

「ん……んあ？」

蘭か？なんだ？こんな時間に……

「どうしたんだよ……」

「どうしたって……新一の家の掃除を手伝いに来たのよ！早く着替えて来なさい！」

「ああ、わーっ たよ」

俺は一ヶ月前組織を倒し、灰原に解毒剤を作ってもらい元の高校生探偵工藤新一に戻っていた。

「あつそーいえば新一？なんか手紙来てたよ？」

「そっか、ありがとう」

ん？まさかコレ……

怪盗キッド…あのコソ泥…何考えてんだ？

その手紙の内容はキッドからの暗号だったのだ。それを俺は解き、
今に至る……

「それで？」

「はい、私が今日名探偵をお呼びしたのは、一対一でかくれんぼを
しないかとお誘いに」

「かくれんぼだあ？何考えてんだよ」

「そのまんまですよ名探偵。私を見つけ出してください、キッドと
しての私ではなく、一般人の私を」

「馬鹿か？オメエーは……何処の怪盗が探偵に自分の正体を探せつ
てゆう奴がいんだよ、しかも何の為に……」

「ちよつと最近名探偵と会えなかったんで久しぶりにスリルを味わ
いたくてね」

なんなんだ？このコソ泥は……何がスリルだよ……

「それでは名探偵、制限時間は1週間。私を見つけることが出来れ
ば私の正体と名探偵の質問にお答えしましょう。もし、私を見つ
けられなければ、名探偵の愛する人を盗まさせていただきます。それ
では名探偵、待っています」

そう言つてハングライダーで飛び立つて行つた。

1週間か…受けてやるぜ？コソ泥さん？

待つてろよ？ぜってーオメエの正体を暴いてやるぜ？

新一はキッドが飛び立つて行つた綺麗に輝く月に誓つた。

1 怪盗の発言（新）（後書き）

久しぶりの更新でした！

こんなにも更新しないなんて私、作者失格です……
ですが気を取り戻して頑張ります！！

えー、ずっと更新していない2人の危機ですが、今年度中には必ず
！完結めざします！

近々、長編小説もかく予定なので決まり次第皆様に報告いたします
後書き長々と無駄文スイマセン！今後も月下の奇術師をよろしくお
願いします！！

2 発覚した正体く新一く（前書き）

新哀のような感じですが違います!!

文の繋がり方が若干おかしいですがご了承ください

m — (m

2 発覚した正体く新一く

翌日、新一は怪盗キッドに関する資料を広げていた。

哀「あら、ギザな怪盗さんの正体を調べているのかしら？」

新「ああ。こそ泥には負けたかねーからな」

そう、新一は昨日の夜、怪盗からいきなりやられた“かくれんぼ”に勝つためにあらゆる情報をかき集めていた。

哀「それで何か情報でも掴めたのかしら？」

新「1つある。俺の父さんのデータの中に初代怪盗キッドの正体が書かれてあった。その正体は世界的マジシャンの黒羽盗一。」

哀「初代ってことは今の怪盗さんは2代目ってゆーことなのかしら？」

新「黒羽盗一、初代怪盗キッドは8年前に亡くなっている。ってゆうことから考えて2代目ってとこだろう……」

哀「私も資料探しくわ。名探偵の貴方なら私より早く見つけてるかも知れないけれど。」

新「サンキューな！灰原。」

それから哀は自分の地下室へと戻り、新一の資料（工藤優作の調べたキッドの資料）をもとに調べ始めた。

それから30分後……

哀「わかったわよ、あのギザな怪盗さん」

新「本当か？」

哀「なんで嘘をつかなきゃなんないのよ……」

新「それもそうだな……んでどうだった？」

哀「怪盗さんの正体は黒羽快斗。江古田高校の2年生でわりと近い所にいるわ。幼馴染みにキッド専任の中森警部の娘の中森青子さんがいて、少し前の貴方達、つまり、正体を隠しているとゆうことね。」

新「す、すげーな……」

新一は哀の調べた細かさに驚いていた。しかも短時間で……

哀「さっそく調べに行くのかしら？そうね、今日は遅いから明日にすることね。」

哀はそう言って工藤邸をあとにした。

——待ってるよ怪盗キッド……もうすぐでかくれんぼも終わりにしてやるぜ！

新一がふと見た空は月が街を照らす今にも白く大きな鳥が羽ばたいていそうな空だった。

2 発覚した正体く新一く（後書き）

ついにわかった怪盗キッドの正体。

新一は無事にキッド（快斗）を見つけ出せるのか！？

見つけてくれないと困りますけどね……

それでわ。

3 せまりくる時間（トキ）〜快斗〜

バサッ

また今日もある学校の教室で新聞を広げている少年がいた。

快「あっ……」

名探偵……あいからわず難事件解決か……やるじゃん？そういえば、やってくれてんのかな？“かくれんぼ”ッ

そう、彼は怪盗キッド。別名、月下の奇術師と呼ばれる大怪盗である。

つい3日前、東の名探偵工藤新一に“かくれんぼ”をしようと誘ってきたのだ。

？「あら、どうしたのかしら？怪盗さん？」

快「あッ…紅子！？」

（紅子ってこんなしゃべり方じゃないですよ？アドバイスお願いしますー！）

快「おっ俺はキッドじゃねーって言ってんだろ？」

紅「んじゃあ貴方が怪盗だとして貴方に言っておくわ。もうすぐ来るわよ？」

紅子はそう言い、去って言った。

はあ……紅子の奴……ん？って事はもしかして名探偵が俺を見つけんのか？案外、早かったじゃねーか。ッ……て当たり前っちゃ当たり前か……あの名探偵だし。

快斗はいかにも挑戦的な不適な笑みを浮かべていた。

3 せまりくる時間（トキ）〜快斗〜（後書き）

紅子のしゃべり方本当におかしかったですね……すみません！！
本当に……アドバイスお願いしますm（――）m

毎日、少なからずとも読んでくれている読者の皆様、本当感謝しています！！

どうか、これからもよろしくお願いします♪

4 追跡…そして待機…新二…(前書き)

サブタイトルがビミョーです……
ってか意味不です……

4 追跡…そして待機…新一…

かくれんぼが始まってから4日目。

新「ここがアイツの高校か……」

今、新一がいるのは江古田高校。そう、この前哀が怪盗キッドについて調べあげた時に仕入れた情報にキッドの正体、つまり黒羽快斗がここにいることを知りやってきたのだ。

新「よし、出て来るまで待つか」

——俺と似てるって本当か？世界に3人はいるっつーけどよ……

なぜ新一が快斗の顔を知っているのか。それは、今日の朝のこと……

時間は先のぼり、今朝の登校中のこと。

蘭「ねえ新一、あの前の人新一にそっくりじゃない？前に渋谷でみ

たのあの人だよ！」

新「ん？……まさかッ……って俺！？」

その男子が見せた横顔をみておもわず声をあげてしまった。だが、その男子は気づいてないようだった。すると

『わあ〜快斗すごい♪どうやったの？』

『ああ？俺はマジシャンだぞ？タネなんてあかすわけねーだろ』

そんな会話がその男子と隣の女子から聞こえてきた。

——マジシャンだと？しかも今快斗って言ったよな？まさかこいつ！？

新一は念のためコナンの時に使っていた発信器をその快斗とゆう男子に付けておいた。

それで調べた結果がその発信器が向かった場所が江古田高校であった。

そこで新一は確信したのだった。

そしてまた時間は戻り…

新一は不自然な様子を出さずに、ただ一人ひそかに待っていた。

すべては怪盗キッドの仮面を剥がしとるために……

4 追跡…そして待機…新…（後書き）

いつもありがとうございます!!

今回、1つのご感想を頂き、飛びはねてしまうほどの勢いで書かせていただきました。 と言っても無駄文ですが……

他にもお気に入り登録や高い評価も本当にありがとうございます!!
そして読者の皆様も本当にありがとうございます!!

私にとってはすごく励みになっておりますm(_____)m

前々から言っておりました長編小説…近々出したいと思います。
つと言っても題名が決まり次第ですが…)

それでは♪

5 名探偵との再会〜快斗〜

快「ん？なんだコレ……」

快斗はあるものを見て呟いた。

——さて…コレって発信器！？まさか、名探偵？そういえば今日の登校中いたよな………そんな時に付けられたのか？………ッそうゆうことか。

快斗は何かに気がついたようで教室の外を見た。

快「おっ？いたいた♪」

授業も終わり、放課後……。

『ばいばい！』

『またね♪』

などの声が学校に響きわたる頃……

青「快斗、帰ろ〜」

快「あつごめん青子！今日俺、用事あつから」

青「えー！！だって快斗、今日の帰りまたマジック見せてくれるっ

て言っただじゃん。せっかく楽しみにしてたのにー！！快斗の嘘つき
！」

快「だからごめんって……また今度みせてやつから」

青「本当？約束だよ！ばいばい」

青子は走って帰って行った。

——悪いな青子……今日はお客さんがいるからな。

快「さてと……行きますか」

快斗は江古田高校を出て何かを待ちわびているように校門へ向かった。

？「おい待てよ」

快「誰ですか？」

本当は誰なのかわかりきっているように聞く。

？「とぼけんなー！しっかりと暴いてやったぜ？黒羽快斗。いや……怪

盗キツドさんよお？」

快「やはり、ここに居ましたか。名探偵……ここでは話にくいので場所を変えましょう？新ーくん」

新「いいぜ？あのよお……そのしゃべり方やめろよ。」

快「わかったよ、俺ん家行くからついてこい」

快斗はここで話されてはまわりに聞こえる可能性があるため、場所を変えることにした。

何処にするか多少迷っていたが自分の事を話しても安全な自分の家にしたのだった。

5 名探偵との再会〜快斗〜（後書き）

はい、やっと5話目ができました！

昨日、今日と2日連続更新は珍しいですね……（私の場合……）

なんか多くの方が見てくれているようで……ありがとうございます！！

この作品ももう中盤か後半辺りでしょうかね……案外まだ前半だった
りして……

さて、この後！名探偵の新一と大怪盗の快斗！どうなるのでしょうか……

（→作者でも未だ不明です……）

では次回に

それでは（＾－＾）／

6 黒羽家で……新……（前書き）

ほぼ会話オンリーです……（――；）

6 黒羽家で………新一

快「さすが俺の認めた名探偵。期限より結構早かったな」

今は俺の部屋に来ている。勿論、俺の正体を見破った名探偵も一緒に。

新「お前の認めたってな………まあだいたい情報は掴めてたからな。なんてったって」

新一が言おうとしたところで快斗が突っ込んだ。

快「工藤優作。つまり、お前の父さんが怪盗キッドの一代目。黒羽盗一を調べていたからだろ？隣の小さいお嬢さんも手伝ってくれてたみてーだし」

新「は？なんでお前が知ってんだ？………さては俺ん家に盗聴器仕掛けといたのか？」

快「ご名答。だって怪盗の基本だからな」

新「オメー、捕まえられてーのか？」

快「い、いえ………でもよーお前も俺に発信器着けてたじゃねーか。同じことじゃねーの？」

そ、それはそうかもしれねーけどな………

新「お前が俺に“かくれんぼ”しようって言ってきたのが悪^{わり}んだよ！」

そうだ、怪盗キッドを見つけろって言われたから乗ってやったのに
よ……

快「それはしっかり理由があんだよ!」

理由? は? この“かくれんぼ”に?

新一は確実にこの“かくれんぼ”を馬鹿にしていた。と言ったただ
遊んでいた。の方が正しいんだろう。

快「今、は? とか思っただろ?」

凶星……

新「なんでわかったよ!」

快「俺はあの怪盗キッドだぜ? “元”だけど」

新「本当にオメー捕まえられてーのか?」

快「だから元! だっつってんだろ?」

新一はもう呆れているようだった。

新「それよりさっさと理由教えてくんねーのかよ?」

快「あっそれはだな……」

快斗はいつこうに口を開こうとはしない。

新「どうしたんだよ、さっさと言えよ」

快「……………」

おいおい……………なんか言えよ……………だつたら……………

新「おい、言わねーなら今からお前警察庁に押し出すぞ?」

快「あ?もう仕方ねえ!俺が言い出したのが悪いし……1回しか言わねーからしっかり聞いとけよ!」

6 黒羽家で……く新一く（後書き）

今回はある意味雑談って感じですね……

今までで一番最低な無駄文です……

さて、お気に入り登録がまた1人増えました！ありがたい！！

是非とも、お気に入り登録をしてくれた方！感想にて《私です！！

》と！お礼の挨拶をしたいので……

それだけでなく、私読んでます！！と言う方も是非！！

読者の皆様に感謝を込めて……

今回は、この“かくれんぼ”の理由が明らかに！なると思います。

おそらく快斗君が言ってくれるので……（＾―＾；）

それでは＼（＾・＾）／

7 かくれんぼの理由〜快斗〜（前書き）

今回も会話中心ですね…………

意味がわからないかもしれませんが…………

どうぞ！！

7 かくれんぼの理由と快斗

快「理由……っつーのわよ……た、ただ単にお、俺の正体をどんくらいであてあれっかなーって……さ？」

明らかに動揺してる快斗。そんな快斗に、

新「そうなんだ……ってそれだけでこんなに動揺するとかおかしいよなあ？黒羽。お前探偵なめてんのか？」

あーあ、もう俺の自慢のポーカーフェイスもぐちゃぐちゃだよ……それはまあ……本当の理由はちげーけどよ……

快「な、なめてはいねー！！」

新「なら、本当の理由を早く言えよ。もうポーカーフェイス崩れてるぞ？完全に」

あつやっぱバレてた訳ね……いつもいる名探偵ならわかるよな……

快「わかった……一回しか言わねーからな！！その……俺、正式なマジシャンになったんだ……だから新一には怪盗キッドとしての俺じゃなくて、マジシャンの俺を見て欲しい……っつーか……応援してほしい？」

快斗は自分でも訳がわからなくなったようで、言い終わった後、すぐにうつむいた。

新「そんなことか？いいぜ？色々オメーには助けてもらっただし……

怪盗キッドを辞めた黒羽をわざわざ捕まえたりしねーしな。そもそも俺はキッドを現行犯逮捕したかったんだしな！」

予想もしていなかった快斗はビックリした様子で目を見開いて顔をあげた。

快「まじで！？いいのか！？」

新「当たり前じゃねーか！」

快「ありがとよ、新一。んで早速、1週間後俺のマジックショーがあんだ！！」

快斗は得意のマジックで何処からかチケットを出した。

快「はい。来てくれよ？俺を応援してくれるって言ったんだからよ！！」

新「わかったよ。んじゃまた1週間後……お前のマジックショー楽しみにしてっからな？」

快「お待ちしてますよ？名探偵」

新「相変わらずだな、怪盗キッド」

快「俺はキッドじゃねーよ。“元怪盗キッド”だ！」

快斗の言葉を合図に新一は自分の家へと帰って行った。

俺も楽しみにしてるぜ？

お前が俺の初のマジックショーに一番最初に誘ったんだぞ？
大切な青子よりも先にな。せっかくお前……新一の為に新しいマジックを用意したんだからな！！

7 かくれんぼの理由〜快斗〜（後書き）

皆さんかくれんぼの理由……わかりましたか？
わかりにくいと思いますが……（――；）

快斗のキャラも……

私はギザな快斗が好きなのですが、妄想ではこうなってしまって……

後、2話ぐらいでしょうか。

今回、期待外れだった方……すみません。

どうか、次話もよろしく願いします！！

8 リハーサル〜快斗〜

ここは俺の初となるショーのステージ。

勿論、客なんて誰もいない。どうしても何も、今日はただのリハーサルなんだからな。

俺はメインのマジックの練習中。このマジックは名探偵への贈り物。それだけじゃねーけど、マジックの内容は秘密、

だって俺とじいちゃんしかこのマジックやること知らねーんだから

……

トントン。

シーンとしたホールに響いたドアを叩く音。

快「誰だ？」

？「寺井でございます」

ドアを開けるといつも助けにくれたり協力してくれるじいちゃんがいた。

だからこそ、じいちゃんにしか言ってない。

快「なんだじいちゃんか…入れよ、誰も客が居ねーとなんかやりにくくてよ……」

寺「やっぱり快斗お坊っちゃまは盗一様に似ておりますね。マジックの方はどうぞいますか？」

快「ああ、順調だぜ？」

そう言つて手の中から薔薇を出した。

寺「そうですか。それは何よりでございます。ですが本当にやるのですか？あのマジックを」

快「やるぜ？そんなに心配しなくても大丈夫だよ。じいちゃんは俺の言つた通りに頼むぜ？」

寺「はい。そこはお任せ下さい。でも本当に心配でございます…幼馴染みの方も来るのでございますよ？」

快「わかつてるよ。それは上手くいけば何の問題もねーよ！！俺はどうしてもこの場で最初で最後としてやりてーんだよ！！」

寺「坊ちやまがおっしゃるのであれば寺井は協力いたします」

快「ありがとな！」

寺「いえ、では……」

そう言ってじいちゃんは出て行った。

《本当ありがとな！じいちゃん、感謝してるぜ？》

今回のマジックは失敗すると相当危険な事（死にはしません）になるかもしれねー……

絶対成功させるぜ？

いや…絶対に成功させなきゃなんねーんだよ！！

8 リハーサル〜快斗〜（後書き）

今回は快斗のリハーサルの様子……（マジックはあまりやっていませんでしたが……）を描かせていただきました。

前話の後書きにて

“ 後、2話ぐらい ”

と描きましたが、もう少し続きそうです。

ここで読者の皆様にアンケートをとりたいと思います。
この物語の最後に“ オマケ ” が欲しいかどうか……

私はどちらともこの終わり方を考えております。

多くの方の意見をお待ちしています m (_ _) m

それでは ♪

9 ショーの始まり〜新〜(前書き)

アンケート、まだまだ実施中です!!
よろしく願いします!!

9 ショーの始まり〜新一〜

新「どれがいいんだ？」

1人で呟いた。

今選んでいるのは、今日初舞台をやる快斗へのプレゼント。
探し始めて30分いまだにいい物が見つかっていなかった。

新「あっ……」

新一が見つけた物……それは……

“ 白いタキシード ”

まるでアイツをおもいたたせる衣装。

新「これにすつか……」

買った後、このデパートの近くにある舞台……そう、快斗のマジック
ショーの舞台へと向かった。

先に黒羽んとこよるか…本番前に渡しちゃいてーしな。

新一が快斗がいる舞台裏へ行ってみると……
ドアに貼り紙…

“工藤 新一 立ち入り禁止！！”

新「はあー！？」

新一の怒りが爆発した。

黒羽のやつ……せっかく来てやったのによ！なんなんだよ。
後からただじゃおかねーからな！！

それからここで怒っていても仕方なさそうなので、プレゼントだけを置いて指定された席に行った。

プ

コツコツコツ……

幕があがりステージの上にライトが照らされた。
出て来たのは、今日の主役の快斗！

………

ではなく……

怪盗キッド！？

いや……怪盗キッドでは無い。正確には……

そう思わせたのは奴の服装。

身に纏った白いタキシード、頭に白いシルクハット……
こいつに無いのはモノクルだけだった……

オメーは正体ばらしてんのかよ……

快斗は真っ直ぐこっち、新一を見ていた。

快斗は新一に対してまわりも気にせず得意の不敵な笑みを浮かべ、あのキメ台詞を行った。

快「レディース・アンド・ジェントルメン！今日は誠にありがとうございます。私のマジックをとくご覧あれ！！」

本当にキザなヤローだぜ……

9 ショーの始まり〜新〜（後書き）

皆さん、お待たせ致しました！長く更新せずにすみません！！

快斗のマジックショーの中身は次話にすることにしました。

今日は《天空の難破船》の公開日でしたね！！早速見に行つて来ました♪

やっぱりキッド様はかつこいいですね（*^^*）

コナン君もかつこよかったですけど……

これ以上語ると内容を言つてしまいそうなので止めておきますm（
——）m

近々、天空の難破船の続きをかいた短編小説を描きたいですね。いつになるか判りませんが……

私……受験生になってしまいました……

なので、更新があまり出来ない可能性があります……

ですが、この《一対一のかくれんぼ》はGW辺りには完結目指して頑張ります！！

あと、もう1つの連載小説はまれに更新（出来るときに）するのでたまにチェックしてくれると嬉しいです！！

それでは、長くなりましたが……

これからよろしくお願いします！！

10 本当の理由、快斗（前書き）

よかったら後書きまでお付き合い下さい！！

快斗

「見てくれよ？ちょっとした……ここからはお楽しみだぜ？」

10 本当の理由、快斗

俺はいつもの様にマジックをした。
俺の初舞台で……

ここには、俺の大切な青子……そして、俺と今まで張り合ってきた
高校生探偵、工藤新一……

観客はビックリなマジックかな？今日のメインイベントは。
でも、俺にとつては最初で、あることは今日で最後……
そしてここで伝えるべき事がある。

快「さて…次は今日の最大 イベント……お楽しみ下さい」

いよいよだ……
もう1つの俺の姿の最後……

——そう
今日、俺は……
怪盗キッドの名に“ピリオド”をつけにきた。

まず黒いBOXの中に何も無いことを、お客さんに見せる。決して怪しまないように……
それを確認させた俺は、その上にただの黒い布を被せた。

快「これから皆さんに不思議なものをお見せしましょう！」

快斗がふと見ると、新一が
《見てやろうじゃねーか!!》

とも言いたそうにしていた。

見せてやるぜ？名探偵……
俺の最後見届けるよな？

快「スリー、ツー、ワン!!」

バサッ!!

布のめくれる音と同時に1つのライトが照らされた。工藤新一の席

の丁度前に。

周りがざわめく……何てったって、この会場に怪盗キッドがいるんだから。しかも、マジックで怪盗キッドが出てきたんだから。

新一以外の方はステージを見た。マジシャンの黒羽快斗がキッドなのだと思ったのかも知れない。
実際に怪盗キッドは黒羽快斗。でも、まさかこのマジシャンがキッドだと思ってた人は新一以外いないのだから。

するとまたお客さんはキッドを見た。

ステージにはしっかりと黒羽快斗が立っていたのだから……

名探偵、驚いてる！！

お客さんも♪

新一が驚いている理由……

怪盗キッドになっっている快斗がなぜか、ステージにいたから。
でも、すぐに笑みをこぼした。新一はステージの上の快斗はキッドの仲間が快斗に化けていると推理したから。

キ「皆さん、こんにちは。怪盗キッドです」

『キッド〜!!』

何処かでこんな寒気のはしる用な叫び声が聞こえたような気がしたがほおっておいた。

新「どうしたんだ？怪盗キッド」

軽いような、ちょっぴり怒ったような声で言った。

キ「それなんですが……私、怪盗キッドは本日をもって引退致します。皆さん、今までありがとうございます。そして会場にいる中森警部、お世話になりました。最後に……高校生探偵、工藤新一君……」

新一がさっさと言えとでも言うような目で俺を見る。

キ「楽しかったぜ？名探偵。名探偵と張り合えてな？この場を借りて言わせてもらおう。ありがとな！！名探偵」

ポンッ
♪

煙幕を張り怪盗キッドは永遠に消えた。この静かな月の下から……
この先、白い大きな羽を広げた鳥のようなキザな奴は見ることは無
くなるだろう。

快「皆さん、お楽しみ頂けましたか？今回のショーはこれで終了さ
せて頂きます。ありがとうございます」

ブ
――

静かに幕が閉じた。
怪盗キッドの名と一緒に……

本当はこれを伝えたかったんだぜ？名探偵♪

10 本当の理由、快斗（後書き）

やっと10話！

マジック、どうでした？マジックっていうマジックじゃなかったですが……

快斗の本当の思い……新一には届いたんですかね？

今回の後書きではちょっとしたマジックショー後の様子を……
どうぞ！！

舞台裏

快「じいちゃんナイスタイミング！」

寺「ありがとうございます、お坊っちゃん。成功して何よりです。」

快「ああ。じいちゃん協力ありがとな？無理に俺に化けてるなんて押し付けて……」

寺「いえ、お坊っちゃんまの正体がバレる方が困りますので……もしかしてその白い衣装は新一様からのプレゼントですか？」

快「そうだぜ？新一は気づいたのかしらねーけどな」

本当に気づいたのか？なんか絶対気づいてなかったような……
そういえば……怒ってたよな……まさか……
まっ今度あった時でいいよな？

本当ありがとよ新一。

一応、これで完結となります。

そこで“オマケ”の件ですが……書くことに致しました！！
意見も1つの決め手ですが、一番は、読者の皆様です！たくさんの方
が読んでくださっているので……

〽オマケ予告〽

オマケは、

・青子 side

・新一 & 快斗 side

の2話でお送りします！！

それでは（*^o^）／＼（^・^*）

オマケ 快斗のマジック〜青子〜（前書き）

青子が快斗のマジックショーを見ている時の様子が主です。

オマケ 快斗のマジック〜青子〜

ここは、ある会場。

なんでこんなトコにつて？

快斗に招待されたの♪

快斗ったら…初ステージだからかな？妙につかれてたんだ……
なんかあるのかな？

青子が席に座るとすぐにマジックショーが始まった。

このマジックは青子にとって見たことのあるマジック。
そして、初歩的な簡単なマジックだけど、青子にとっては思い出のマジック。

手に薔薇が出てくる…

青子は気づいた。

快斗がそのマジックをした時、懐かしい思い出を振り返っているような目…

快斗…覚えてるかな？

前にも“きつと忘れてる”って思ってたら、ちゃんと覚えてたし。

快「さて…次は今日の最大イベント……お楽しみ下さい」

快斗の声が響いた。

今日の最後のマジック…

青子はこんなことするなんて思ってた。なかった。

箱の中を確認させる快斗。そしたら上に黒い布被せて……
カウントと一緒に布を取ったと思ったら…

怪盗キッド

なんて出てきちゃった…

そしたら隣にいたお父さんは叫んでるし……

青「え？もしかして……」

普通に快斗のマジックに驚いてたけど、あることがうかんだ……

《快斗＝怪盗キッド》

まさか……

青子はステージを確認。

確認するなり青子は胸を撫でおろした。
ステージにはしっかり快斗がいたから。

青「はあ……ビックリした……」

ため息まで出てしまった。

そしたら突然、怪盗キッドからの引退宣言！！
お父さんは口があいて閉まらなくなっていた……

最後には“この場を借りて”なんて言つて、怪盗キッドの確保に手
伝ってくれた新一君にお礼の言葉なんて……
違う場所で言いなさいよ！！せつかくの快斗のステージなのに……

そんなこんなで快斗のマジックショーは幕を閉じた……

快「おーい青子ー!!」

次の日の朝……

いつも通りの快斗。

青「あつ快斗おはよ！マジックよかったよ？」

快「ありがとな？成功してよかったぜ」

青「もう青子なんて快斗がキッドなのかって……」

快「！？」

ん？快斗？

青「まさか……」

快「ちげーよ！！勝手にマジックに参加してたんだよ！」

ふーん。まっいーや！！

青「とにかくよかったよ？次も招待よろしくね？」

快「ああ、もちろん♪」

ポンッ

快斗は薔薇を出した。

青「ありがとう」

快斗ありがとう。

まだ覚えててくれたのかな？

青子は快斗のマジックが大好き！！

この先も青子にマジックを見せてね？

快斗も快斗のお父さんの盗一さんみたいに世界一のマジシャンになるの、応援してるから……

オマケ 快斗のマジック〜青子〜（後書き）

オマケ第1段！

今日は青子ちゃんと快斗君にきてもらいました♪

快「なんだよ…突然“ちゃん”とか“君”付けにしゃがって」

まあまあ……

んじゃ、さっそくインタビューー！！

青子ちゃんからどうぞ？

青「青子？快斗のマジックすごかった！！本当に快斗には世界一のマジシャンになって欲しいな？」

だって！よかったね、快斗？

快「あつたりめーだ！俺は世界一目指してんだよ」

次は快斗、どうぞ！！

快「とにかく青子バレなくてよかったぜ。じいちゃんのおかげだな！！」

青「バレなくてって何よ！！あつそういえば、この小説のタイトルって“一対一のかくれんぼ”だよな？」

そうだよ？

青「何やってたの？快斗！」

快「ひ、秘密だ！！ちょっと作者！！助ける！！」

フフフ♪

頑張れ、快斗！

長々とスミマセン。
最後に作者から…

続編決定！！短編ですけど……

この小説も次で完結です……皆さんありがとうございました。

青「快斗ー！！」

快「助けてえ？！！」

（笑）

オマケ 交わした約束〜新一&快斗〜（前書き）

一対一のかくれんぼ。

いよいよ完結です！！

皆さんありがとうございました！

オマケ 交わした約束〜新一&快斗〜

・新一 side

快斗のマジックショーがあつたその翌日……

俺は、事件もなく暇だったため適当に街中をブラブラしていた。

新「快斗？」

ファミレスで新聞を広げた快斗がいた。

新「よお、快斗！」

快「新一か？昨日は来てくれてありがとな。」

新「ってゆうかお前なあ……自分の正体ばらしてんのか？」

快「んな訳ねーだろーが！！あの俺のマジックショーは始まりであつて、偽りの姿の終わりだったんだぜ？わざわざ俺の正体をバラすような真似はしねーよ。」

新「じゃあなんであんな姿でステージに出た？」

快「お前が置いて行っただろ？白いタキシード」

白いタキシード？

もしかしてプレゼントとして買ったやつか？

そういえばコイツ……

新「俺のあげたタキシードを来てくれたのは嬉しいぜ？でもよお……
……「工藤新一　立ち入り禁止」ってどーゆー意味だ？」

・快斗side

もしかして新一はそのことに対して怒ってたのか？

マジシャンが自分のショーの裏にお客さんを入れるなんてするかよ
！！

特に今回は新一へのメッセージをかねてたからな。

快「裏にお客さんは普通入れねーよ、マジックショーなら特にな！
！ってゆうか昨日から新一はそれで怒ってたのか？」

新「そりゃ……」

納得してくれたようだな……

『怪盗キッド引退だって!!』

『うそ!! えー大ファンだったのにー』

突然、誰か高校生ぐらいの女子の声がした。

大ファンか、嬉しいけど…俺の仕事は終わってしまったので……

新「何お前ニヤニヤしてんだよ……さっきの女子の言葉か？昨日からニュースとか新聞とかで怪盗キッドが引退！ってうるせーからな」

快「嬉しいことだな、でももう俺は怪盗キッドにはならねーからな」

新「お前はこの先どうすんだ？」

快「もちろん世界一のマジシャンを目指すぜ？父さんを抜かせるな
!!」

新「快斗らしい答えかもな！世界一のマジシャンになったらお前マジックショーにまた招待してくれよ？」

快「ああ、もちろんな。特等席を用意しとくぜ？」

新「約束だぜ？」

約束なんてしなくてもそうしたと思っぜ？

俺は追われてた身だけど新一には感謝してっからな！！

見てろよ！！名探偵。

近いうちに世界一のマジシャンになって、あっと言わせてやるから
よー！！

この約束は快斗が世界一のマジシャンになるまで続くだろう。
探偵と元怪盗の対立した者どうしの約束。

この2人でしかこんな約束なんて出来なかっただろう……

完

オマケ 交わした約束〜新一&快斗〜（後書き）

はい。

これでこの物語は終わりです……

予定ではいつになるかわかりませんがこの続きとなる小説を書こう
と思います。〇〇年後……快斗は……
みたいな感じかな？

本当に皆さん最後までありがとうございました！！

この小説を完結まで描き進められたのは応援してくれた方々と読者
の皆様のおかげです！！

ありがとうございました！！

それでは今回の主役、新一君と快斗君に来ていただきました。

2人共、かくれんぼしてどうだった？

新「最初はかくれんぼなんてなめてたけど……結構楽しめたぜ？コ
イツのポーカ―フェイスがグツチャグチャなことかおもしろかつ
たぜ」

快「グツチャグチャなポーカ―フェイスで悪かったな！あん時は特
別だよ！って作者だろーが、こんなことにしたのはよー！」

はいはい、そうでした。

快斗ごめん。

今回はこの辺で……

新・快

「快斗（俺）と青子^{ちゃん}時は長くて俺たちは短いんだよ……」

仕方ないじゃん。

2人はこの物語の主役だったんだから……

新・快

「んな訳ねーだろ……」

息ぴつたり♪

まあこの2人は置いて……

本当に最後までありがとうございます……！！

これから月下の奇術師をよろしく願います……！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8941j/>

一対一のかくれんぼ

2010年10月9日16時35分発行